

田富小だより

令和4年度
第10号
1月27日
田富小学校



2023年がスタート！！

新しい年が明けて早ひと月が経過しようとしています。遅ればせながら「明けましておめでとうございます。昨年は、本校教育活動にご理解・ご協力をいただきありがとうございました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。」

さて、「2023年の子ども達は…」という、すこぶる元気で遅いです。寒さにも負けず、外で鬼ごっこ、バスケット、サッカー、ドッジボールと休み時間はとても活動的な児童が多いです。1月25、26日は10年に一度程度の厳しい寒波が襲来しました。24日夜には、この中央市も吹雪に見舞われましたが、翌日も子ども達は元気に登校（こども守り隊の皆さん、寒い中、本当にありがとうございます。）しました。余談ですが、雪が降った夜、吹雪の中珍しい風景に驚きの外国籍児童が遊ぶ姿も見られました。翌朝は、ほとんど雪は残っていませんでしたが、校庭の日陰に残る僅かな雪をかき集めながら雪合戦を楽しんでいる児童もいました。日中の最高気温も4度前後という寒さの中、手袋もせず飛び出して笑顔いっぱい遊ぶ子ども達が印象的でした。

始業式の児童代表の言葉では、3名の児童が3学期の抱負を話してくれましたが、実にしっかりと目標を立てていました。4年生の児童は、忘れ物が多いことを反省し、自分なりの取組をはじめたら、忘れ物が減ったこと、転入してくる外国籍児童が安心できるように、ポルトガル語や英語で話してあげたいこと、テストでいい点を取りたいので、自学でしっかり復習することなどをめあてとして定めていました。2023年の抱負としてとても素晴らしいと感じました。

年が変わるタイミングは何かを始めるには最適です。これまでの悪習を改めるきっかけとしたり、何かひとつ打ち始めるものを始める機会としたり、普段の日付の中ではなかなか区切りがつきにくいところですが、新年はそれが容易にできるような気持ちにさせてくれます。私も児童に、そんな話をしました。そして、立てた目標は本人の努力によって達成されると話しました。少しずついいから、目標がただの飾りにならないように自ら努力してほしいものです。児童一人一人が2023年を充実した年にしてほしいと思いました。

ブラジル日本国総領事が来校

ブラジルの在リオデジャネイロ日本国総領事館、橋場健総領事が1月17日、本校を訪れました。これは、ブラジルのミナスジェライス州と山梨県が姉妹県を結んでおり、今年で50周年を迎え、来日したときの予定のひとつとして行われたものです。本校に来校された理由ですが、県内でも特に外国籍児童が多く在籍しており、ブラジル国籍の児童が多いことから、視察したいということでこの予定になったそうです。この日は、橋場総領事とミナスジェライス州政府企画長官、県・市の関係者が5名の計7名での来校でした。

丁度、本校は、分散形式による授業参観日にあたり、保護者の皆さんと一緒にタイミングで授業を参観されました。まず、はじめに日本語指導教室の授業を参観されました。5年生を対象とした「方言と共通語」の国語の授業、6年生を対象とした日本文化や伝統への理解と関心を深める教材として、落語「まんじゅうこわい」の視聴と小道具を使った落語の表現方法についての国語の授業を参観されました。橋場総領事は、外国籍児童が日本の学校に予想以上にとけこみ、慣れ親しんでいる様子に驚いているようでした。そのあとは、普通教室をすべて視察され、一人一台端末による指導や外国籍児童の音楽の授業での独唱活動にも笑顔で接しておられました。本校では、外国籍児童対象の日本語指導においては、個別の指導計画に沿って、その子の日本語能力の向上はもとより、当該学年における、教育内容を習得するためのカリキュラムに基づいて指導をしています。少しで



も早く、日本の言葉を覚え、日本の子ども達とコミュニケーションをとり、将来に向けて進級、進学するための学習がきちんとできるようにと願いながら日々の教育活動にあたっています。そんな様子を視察され、子ども達が手厚く指導を受けている様子に感心されていたようでした。橋場総領事は授業視察後、外国籍児童数名と、流暢なポルトガル語で言葉を交わし、本校児童も笑顔で話している様子が印象的でした。

白銀の世界へ！

3学期が始まって間もない1月13日(金)、5・6年生で、長野県富士見高原へスキー教室に行ってきました。当日は、温かく、絶好のスキー日和となり、子ども達も存分にスキーを楽しむことができました。ウィンタースポーツに親しむことは、子ども達の発達のためにも、とても重要な要素をもっていると思います。ですから、季節や場所に大きく限定されるこういったスポーツに触れる機会は貴重なものだと思います。

とある統計情報によると、スキー・スノーボード人口は、1993年の1800万人をピークに減少傾向が続いており、2020年には、ピーク時のおよそ1/4にあたる450万人ほどになってしまったそうです。用具などが高価でお金がかかることや、スキー場まででか

けなければならないという不便さも手伝ってだんだん減少したようです。そこに追い打ちをかけたのが、コロナによる外出制限や自粛です。一般家庭においても、スキーに出かける家族は昔に比べて減少していると思います。そんな状況であるからこそ、学校単位でウィンタースポーツに親しむ機会があってもいいだろうと益々考えてしまいます。

今回のスキー教室においても、体育実技が不得手で、スキーも行きたくないと言っていた児童もいたようです

が、いざ、経験してみると、初心者でありながら、リフトにも複数回のり、見事に斜面を滑走したと聞きました。そして「超！楽しい」と感想を述べていたそうです。子ども達の喜ぶ顔を見るだけではなく、様々な面での発達を考えた時、こういった貴重な機会を今後も残していくことが大切なのかと改めて思いました。



動物愛護の心を育む

本校には一羽のウサギが居ます。名前はクロ。比較的小となしめで、あまり生野菜を食べないウサギです。もとは、ウサギが増えすぎて里親を探していた八田小からいただいてきたウサギなのです。つい最近、学校で動物を飼育するところが少なくなっているという内容の報道を眼にしました。休日や休業の時の世話、病気への不安などその理由は様々です。しかしながら、飼育していることで子ども達の学びも多くあると思います。

前任校では、動物病院の先生が来て、ウサギという動物について、その習性などを話してくれたり、ウサギの抱き方を教えてくれたり(ウサギはピョンピョンするイメージですが、後ろ足の骨はとても脆いそうなのです。それで、暴れたりしたときに高いところから落とすことがあるとすぐ骨折してしまうという話を聞きました)、心音を聞かせてくれたり、1時間くらいを費やして触れ合う時間がありました。田富小でも1年生がウサギと過ごす時間を設定しています。小さな命に出会った子ども達は、その存在をしっかりと感じ、自然と優しさをもって接していくようになります。動物は言葉を話しません。今どんな思いでいるのか飼育する側が推し量ってあげなければならないのです。子ども一人一人が、そういう心情を育て、周囲の様々な生き物や人と優しく接していくことは素晴らしいことです。それだけでも飼育することの大切さはあるはずです。

1月末の寒波の中、一生懸命世話をする飼育委員の子ども達に人としての優しさをいつも見ることができるのです。

